

(6) 同和問題学習を終えて

(1) 生徒の反省と感想

『同和問題を学んできた一年間の取組みの中で自分自身が変わったこと同和問題について分かってきたことについて』

* 最初同和問題なんて私には関係ないと思っていました。でも先生にいろいろ教えられてやっと気がつきました。「差別」は自分にとって身近なことなんだなと。そうすると、今まで気にしていなかった「差別」の事が目や耳に入ってきました。この一年間みんなと共に取り組んできた「同和問題」3年になってもこの問題について考えていきたいと思います。

* 同和問題を学んできて、差別を無くそう、差別はいけない、そういう言葉をいやというほど聞かされてきました。でも「差別を無くそう」とはいうけれどどうやって差別を無くすのか分かりません。ただ、講演会のようなものを開いたり、解放文化展のようなものを開くだけで差別は無くなる分けがありません。なんの違いも無く本当の相手の気持ちを分かることこそ差別を無くする一歩だと思っています。

* 無理して難しい答えを出すよりも自分の思っていることをはっきりいった方がいいと思うようになりました。もしかしたら、難しい答えは間違った考えを持っているかもしれない。「差別を無くす」という結論だけ分かっててもダメだと思います。私もいままでは差別をなくすといっても何もできないと思っていました。無くすことよりも先に難しいと答えをだしてこれで差別を無くすことができると勘違いをしていました。同和問題学習をしてきて、ほんの小さなことでもクラスや学年全体なんかで頑張れば何かいい結果がでると思うようになりました。

* 前にもいったけど自分の思っていることをそのまま伝えるということ。誰にだって醜い心はあります。でもその醜い心を隠してはだめです。その醜い心を人に見せなければいけません。見せたら人に軽蔑されるかもしれません。でもそのことを隠し続けることなんてできません。隠されている方も隠している方も両方つらいです。差別されている方も差別している方も両方苦しいです。その、お互いの心のおくにあるものを相手に分かるまで伝え続けなければいけないと思う。

* 私は同和問題を学んできてよく分かってきました。初めは部落とか差別とか私には関係の無いことだといって、自分が部落の人間でないからいえたと思いました。中1のときお父さんがA小学校の人たちと友達になっても遊びにいったりしてはいけないと言われました。その時私は何も聞かず「うん」と答えただけでした。それからすぐお姉さんにそのことを言ったら「部落の子たちがおるからじよ」と言いました。お姉さん、お

父さん大嫌いといっていました。何で、部落の子だけにそんな差別せないかんの、と言いました。私はそういう面でいろいろ同和問題に取り組めるようになってしよく分かってきたと思いました。部落出身の人たちの伝えて来る心を受け止めていきたいと思う。

* 自分が変わったと思うところははっきりいえないけれど「自分以下をさがす」というのが以前よりは少なくなってきたことです。それと、心のすみで「人間はみんな同じ」といきていることです。新聞の登校欄とかで差別されていた人の事とかの記事を読んでいると心のすみの方から「なんで人間はみんな同じなのに差別せなあっかんのえー」とわき上がって来るものがあります。このわき上がって来るものは、一年間の取組みの成果だと思えます。

* 私は一年間同和問題に取り組んで一つ大きく変わったことがあります。前までは先生に怒られるからとかみんなに冷たい目で見られると思って差別をしてないようにしていました。それが一年間勉強して変わったんです。本当に心から相手の事を少しずつだけ分かっていくことができるようになりました。外見上はぜんぜん変わりませんが、心が少しずつ変わってきたと思います。そんなことが私はとてもうれしいです。

* 差別される人のつらさ、苦しさが段々分かってきました。それから、前までは差別をしているとは思わなかったけどいろいろ差別があることが分かって、あれも差別だとか差別の事についてもわかってきました。だから差別をしていることに気付きなおしていけるようにしていきたいです。

* 同和問題を学習しているうちに差別に勝つてやるという自身が段々高まってきました。これからいろんな差別にであうかもしれません。でもこの差別にであったときはこの一年間を思い出して差別に立ち向かっていきたいです。

* D組の公開授業のとき部落宣言をした人がいました。まだ覚えています。泣きながらも一生懸命自分の気持ちを精一杯いっていました。私はそれを見ていて「頑張れ」といいたくなりました。私はその人が部落出身だということは前から知っていましたが今までそんな事は何であろうと、部落出身であろうと関係ないと思っていました。もちろんいまでもそうです。でも私は、宣言してから、何かその人に対して特別みたいな態度をとるようになったと思う。やっぱりこれはその人が部落だという思いが無くて、宣言したときに思ったのでしょうか。そうすると私はその人に同情しているだけ、他に何もしていないことになるんじゃないかと思う。これは絶対私は差別をしている。何とかしたいと思っているけど、その人の前に来るとついつい「がんばれ」と思うのと一緒に同情している。その人になりきれはるはずがないのに、分かりきっていないのに同情するんです。してしまうのです。

* 2年生になって公開授業という初めての事があったので、みんなもそうだと思うけ

ど同和問題についての勉強に力が入りました。そして真剣に考えれば考えるほどもっと勉強して早く無くさなければなあと思えました。この一年でかなり同和問題についての認識というかそういうのが高まりました。他の中学校でも公開授業をして欲しいです。

* 私は最初融和運動的な心しか持っていなかったけれど、この一年間学習していくうちに、心の中になにかたまらなく熱いものがこみあげてきて、この問題は私の一生にかかわっていくことだということが分かり、本当に学習したいという気持ちが湧いてきました。そして、どうしたら差別が無くなっていくかという問題の答えに一步步だけ近づいてきているような感じがとてもしました。だから、3年生になっても大人になっても差別と戦っていけるような強い心をもって生きみんなと話し合っていきたいです。

* 私は落ちついて周りを見られるようになりました。今迄はいつも一人急いでいたような気がします。そして人の意見もきちんと聞くことができるようになりました。心を広く持てたことが私にとってはすごく変わったことです。

* 前の自分は簡単な気持ちで適当に同和問題学習を受けてきました。そんな自分が恥ずかしいです。でも、この1年の取組みの中で僕は変わりました。同和問題学習の大切さと、自分から真剣になってやるという気持ち、それと団結ということの大切さを学びました。そして、僕達が今迄の人たちの勇気と自信を受け継ぎ部落差別に立ち向かっていかなければならないということ学びました。

* 一年前に比べて少し考え方が変わってきました。マラソンではしることでできない子がいればみんなが一緒になって走るということはいいことだと去年までだったら考えていたかもしれません。でも、同和問題学習をしていくと、そんなことはよくないことだとわかってきました。そして同和問題学習は勉強と同じくらい大事と思っていたのが勉強よりももっとも大切だということがいっぱい同和問題学習をして分かりました。これからも同和問題学習があると思うけどそのたびごとに真剣に取り組んでいきたいです。

* ほんなに自分自身が変わったりできなかつたけれどちょっとだけ自分の本当の気持ちがいえるようになりました。そのことが少うれいのです。建前とかのきれいごとではなく、きたなくても自分の意見をいえるようになりました。だけどまだまだ本当の自分を出せていないので少しずつでも自分の思いを人に伝えていこうと思います。

* 最初の同和学習のときとかはしんだくて「なぜこんなことをしなくてはいけないんだろう、私は差別やせんけんいけるわ」など思っていました。でも、今思うとそんな気持ちが差別しているんだ、と思えずごく心に針が突き刺さったみたいでした。自分はまだそんなに大きな差別に立ち向かっていったことはないけれどいまもどこかで差別に苦しんでいる人がたくさんいると思います。そんな人がいなくなるように頑張りたいで

す。

* 自分自身のおく深く眠っていた心が醒めたような感じで差別心も少しずつ無くなってきている。それにごく身近なところにも差別はあるということが分かった。今迄はなんとも思っていなかったことが差別だなんて。でも同和問題学習をしていくうちに分かったことがもう一つある。それは、一人では無理なことでも何十人、何百人と人が集まれば解決できるということだ。

* 1年の時も同和問題学習をしてきたけれど2年生みたいにかくさんはしていません。同和問題学習をするたびに感想とかを書いてめんどくさいなあとか、どうせ感想なんか書いても差別が無くなるかどうか分からないのにか思っていたけど、今ではこれまでにたくさんの資料を使って学習してきてよかったなあと思います。その理由は少しずつ差別をされる人がどんないやな思いをするか分かってき始めたし、今までとは違った感じで同和問題学習に取り組めるからです。

* 自分のいった言葉に反省できるようになった。言っではいけないことを言っではまって人を傷つけてしまったら、これからこの言葉は使わないでおこう、そしてこういう風に言おうというように反省できるようになりました。「……してあげたい。」とか「……してあげる。」のように部落出身の人を見下げたような言葉を使っている人がいる。部落出身の人が部落出身の人をバカにする。まだまだ、身近に差別は残っているのだなあと思った。間違っていることを間違っていると言わなければならない。思っているだけではいけないということが分かった。

(2) 同和問題学習を終えてー反省と課題

① 本校には25%の対象地域の生徒が在籍する。私たちの同和問題学習のねらいの一つはこの子たちに本音で語ることを意味づかませることにある。腹立たしい、悔しい、辛い、悲しい、そんな心の奥にある気持ちをこの子供たちはいままで本当に腹の底から語ることがあったのか。互いに自分の思いをぶつけ合うことがあったのか。私たちは残念ながらそのことに否定的にならざるを得ない。2Dの全体授業のときK・Tが自分の思いを語ろうとして絶句し涙を流し、授業後その周りに級友の輪ができたのを見たとき私たちは今までの同和問題学習に対する取組みの甘さを思わずにはいられなかった。2EのK・Tの担任に自主的に提出したノートにある「部落の人間の辛さや悔しさが分かっていない」「はっきりいって先生も私は疑っている。」「私はもう聞きたくないって思っている」「勇気なかった。言いたいことが言えなかった。」という子供たちの声をどう聞いていくのか。それは私たちにつきつけられた子供たちの叫びである。俗な言いかたであるが「性根を据えてかかる」ことの意味を初めてつかめたような気がする。自分の人間としての生き方を問うのだということの意味が分かり始めたような思える。私たちは一年間の同和問題学習を通して生徒以上に教師としてこの問題にどう取り組まねばならないかという姿勢を確立することの大切さをつかむことができた。

その意味で公開授業における同和問題学習は私たち教師にとって大きな意味があった。

② 多くの授業を通し子供たちはやっと重い口を開き本音を語り始めた。対象地域の生徒にとっては辛くやるせない思いであり、地区外の子供たちにとっては自分の差別心と向い合わねばならないことである場合が多い。しかし、そこを通りぬけることなしには解放に結び付く同和問題学習は存在しない。授業実践のなかでその本音の思いを全体の場で語ろうとする入り口まで来た。残念ながら入り口にすぎない。本当の場はこれからである。「自分の手がなぜこれほど重いのか」という生徒の「あゆみ」がある。本音を語ることは「重い」ことなのだ。重いからこそ、それをつき破ったときには大きな力がでてくる。「差別解消に向けての実践力」とは今の中学生の段階においては人の前で自分を語ることでないか。それさえさせないで10年後を言っても話しにならない。子供たちはその正義感と理想主義の故にときにはしゃべるだけに終わるかもしれない。しかしそれは必ずといっていいほど人間として通る道である。それを超え目の前で苦しみを見それに憤り共に涙を流すなかから大きな力が生まれてくると考えている。あと一歩でこの子は抜けることができる、そういう感じを持たせる生徒が増えてきた。あと一歩である。これを引き出すのは教師の思い以外にない。教師の姿勢がそのまま子供に転移していく。

③ 地区外の生徒は、「だれが地区の生徒であるか」は暗黙に了解している。それだけに安易な取り組みでは建前だけを話すことに終始する。その子供たちの心をゆさぶり建前から抜け出させることは、教師の百の話しよりも友の語りである。叫びである。そのような授業を組織し展開することこそ私たちの勤めである。全体学習の場においては生徒間の意見の衝突、生徒と教師の真剣な話し合い、そのような場が持てたことは進歩であるがまだそれが私たち教師全員の力量にまでいたっていない。互いに議論し協力し研鑽を進めていかねばならない。

④ 父兄との連携については不十分なままに終わった。第一回の公開授業はPTAの代表者も授業参観をしていただいたがその後は学年のみの研究で終わった。授業について生徒の感想等については学年通信を通してしらせてはあったがPTA・学校一体となった取組みには程遠いものである。今後の課題である。

⑤ 天狗石先生は今年大学を卒業された若い先生である。担任ではなく教科担任として各クラスに入っているにすぎない。今まで道徳の授業はもちろん同和問題学習は初めての取組みである。不安もある暗中模索のなかで研究授業に取り組んでくれた。そのことは私たちの今年一年の取組みを象徴しているように思える。自信もない、経験も少ない、しかしともかくスタートして見よう。実践を積まない限り話しにならないではないか。そんな姿勢を見せてくれた天狗石先生の実践であった。

⑥ 私たちの実践は歩きながら考えるものである。至らない点が多いし、改善の余地がある。遠慮のない御意見をお願いしたいと思う。私たちは謙虚に受け止め次年度に活かしていきたいと考えている。

ともあれ、今の私たちの正直な気持ちには私たちでもここまでやれたという一種の充実感がある。不十分なものはあるがそれでもこのような実践ができるとは思っていなかった。同僚に恵まれたことを互いに感謝したい気持ちでいっぱいである。